

桃井富範

言語文学特論レポート

『イリアス』について調べてみました。ギリシャ軍の総指揮官アガメムノンが女捕虜ブリセイスを奪い、この争いは宇宙的規模の戦いへ拡大すること。万国共通で争いの種は女と相場が決まっているようですね。しかしながら、女にも責任があるのではないのでしょうか。むしろ、最近女が悪いような気すらします。

その後トロイアの長老達は城壁の上に現れたヘレネの美しい姿を見て、「このような女のためならトロイア人とギリシャ人が長年辛酸をなめたものがめられない」という。というか、こういうことを言ってるから戦争がなくなるんですね。

さらにまたその後アキッレウスはアガメムノンからブリセウスと贈り物を受け戦場に赴くとのこと。やはり、女は男のために戦い、女は男を戦わせずにはいられないということでしょうか。

そのあとアキッレウスは戦場にてバツバツと他の英雄共を薙ぎ倒し、最後には自分自身も死んでしまうのである。ここまで読むと、僕ももう、出家でもしようかなという気分になってきます。

僕はドストエフスキーを読んでいます。文学のある1つの普遍的な様式として、男性が美しい女を巡って争いあうという形式があります。女もまた、男を戦わせ、その中で自分の地位を高めようとするわけですね。近年のドストエフスキー研究では、人間はみんな病気だとか何とか言ってます。そもそも病気といった概念そのものが人間の作り物にすぎないんですね。人間という皮を剥いだ時に、剥き出しの人間が残り、それは種を残し続けてきた、他のどの生き物とも変わらない、ただの生物としての普遍的様相であり、しかしながらそれは人間としてみた時には普遍的悲劇ともなるわけですね。

最後に、わたしは、はらで思っていることと、口に出していることが違うような男は、冥府の門と同様嫌いなのだという安西教授の言葉がありました。これが一番今回教授の言いたかったことではないかと思いました。ならば言いましょ。僕も女は大好きです。多分女に生まれていたら男が大好きだったでしょう（笑）